

れも日支相剋の苦しみを四六時中體驗しつ
つある私が、より朗かな、より健やかな東
洋の更生を必死に願ひつゝ書いたものだ。

尚ほ附録として蒐録した三篇は、古き中
國の筆記小説に材を取つたものであること
を斷つて置く。

昭和十三年初夏

北京にて 著 者

目 次

北 京 の 文 人	三
北 京・天 津 の 文 化	三
大 學 生 と 女 學 生	四
現 代 支 那 文 化 の 波 瀾	六
支 那 讚 美 論	六
支 那 の 大 衆	三〇

哀歌の民	三六
日本の女・支那の女	三三
新支那の女性	三五
北京の女	三五
妻の賢徳・妾の妖態	三六
清明の頃	三七
于蘭盆妄想記	三九
楊朱の夏・老子の秋	三六
冬の北京郊外	三三

萬壽山異状なし	三三
支那劇の女形	三三
私の北京非籠城記	三五
怪談『鼻から髪の毛』	三六
附録	
神よりも聰明	三六
無題の遺書	三六
楡の葉の魔術	三六

北京の文人



中國人民戦線運動の大なる闘士として、また、例の『團結奮闘のための、數個の基本條件と最低要求』と題された歴史的な文獻の署名者の一人として、日本でも有名になつてゐる章乃器は、嘗て中國現代のインテリゲンチヤに關し、左の如く悲憤慷慨したことがあつた。

『半植民地型のインテリゲンチヤと謂ふのは、封建の瓦杯（わがい）のうへに、帝國主義の金メッキを施したものである。彼等は半植民地の特産物だ。だからして、中國に於ける、その産出は甚だ多い。外國人の所謂高等華人、及び若干の作家によつて、士大夫と命名された一派の人物は、掛値もなければ割引きもない半植民地型であり、また、自ら進歩的たौरぬ、ほれてゐる青年インテリゲンチヤにしても、往々にして幾分か半植民地型の癖がある。若し我々が中國インテリゲンチヤの履歷なるものを調べてみると、或は縉紳の裔であつたり、或は名門の出であつたりする』

——封建的な関閥など、勿論決して愧ぢとはされないのである。間々さうでないものもありはするが、さうした連中は俗語で言ふ（何處の馬の骨だか知れない代物）だし、鹿爪らしく言ひまはすと（素性潔白ならざる輩）なのだ。斯うした連中は學校でも、高貴なるクラスメイトから往々にして（共に伍するを恥づ）と言つたやうな待遇を興へられる。』

原文は勿論之れだけでは終つてゐない。尻切れ蹄みたいな文章は、人民戦線時代の中國ではどう言ふ譯かあまりはやらなかつた。彼は之れに續いた文章で、彼の所謂、半植民地型中國インテリゲンチヤの醜態を忌憚なく描寫した。諷刺した。その筆句、次のやうに結んでゐる。

『今、私は二つの希望を持つてゐる。第一は將來の中國青年が再び半植民地型のインテリゲンチヤとならないことである。第二は、文學者のなかの誰か、阿斗正傳なるものを著して、半植民地型のインテリゲンチヤを思ふ存分描破することである。』

『阿斗正傳』とは、例の魯迅の出世作『阿Q正傳』に語呂を合はせたもの、而して阿斗とはお坊ちゃんと言ふやうな意味である。

併して、章乃器の此の一編を通讀したとき、私は、案を拍つて感服した。流石は人民戦線なん

て、大それた運動の闘將だけあつて、自分の周圍をよくも鋭く觀てゐるな……と内心舌を巻いた。が、同時に彼の『希望』なるものが少々氣になつた。殊にその第一が。彼は中國青年が再び半植民地型のインテリゲンチヤとならないやうに冀つてゐるが、それならば一體どんな風なインテリゲンチヤとなれば好いんだらうか？ 章乃器はその點で直截明瞭な指示を興へてゐない。『お玉杓子は蛙の子なり』と言ふやうな風にハッキリしたことを言つて貰はないと、萬事どうも納得しかねる私は、恰かも村癡たちが鎮守の社にお籠りでもしたやうな敬虔な氣持で、三日三晩、しきりと首をひねり疲らした筆句の果て、漸つと名案が浮んで來た。外でもない、古くから中國に存してゐたインテリゲンチヤの一種たる『文人』を復活することだ。もつとも復活と言へば語弊がある。何故ならば『文人』には今でも澤山活きた見本がある。殊に東洋文化の集藪の地として、途方途徹もなく有難がられてゐる北京などには、ふんだんに居ると言つても過言でない。従つて復活と言ふよりも、寧ろさうした見本を總動員して、中國青年をその感化の下に陶冶せよと言ふべきであらう。

ところで、一體全體中國の『文人』とはどんなものであらうか？ 管々しく抽象的に説明す

耐へ兼ねて『阿姉を妻にしたい』と囁く。送端に翁が立現はれて『我が掌中の珠を狙ふ不届きな奴を畜つては置けぬ！』と怒つた。彼は懼れて家に逃げ歸る。こゝらの描寫は全然ウキンクルを摸したとしか思へないほどで、結局彼は一夜まどろんで目がさめてみると、白髪の翁とかはつてゐたといふ。

ウキンクルには色氣がなく、筋は突飛でも現實の匂ひが鬱陶しい。正に物質文明とヒューリタンの思想の縮ひまぜられた亞米利加の傳説である。浦島と乙姫の關係はお伽噺の純潔さこそあれ、性の香は微塵もなく、茫々と果しもなく浮世離れせる點で、如何にも印度の寂滅思想などを其のまゝ體呑みにするほど現世慾に淡泊な日本の民話らしい。然らば紫玉はどうか？ 夢幻の世界を描いてゐるものゝ、徹頭徹尾現世的で、性的で、肉の香と脂粉の媚とが鋭く鼻をつく。

私は此の三者を比較することによつて、中國文藝の特異的な、そして強烈な美が、中國人の激しい現世的な性慾に出發してゐることをまざまざと認識した。同時に此の美に冠する言葉の日本にも西洋にもなきを察し、中國の語彙を探つて『香艷美』と名づけた。

勿論この美に似たものは西洋にも日本にもあるが、それは艶つばさ、仇つばさ、若しくはエロカルなもので、中國の香艷美はそれらと趣きを異にした激しい、軍制的なものである。

さうした灼熱的な香艷美の創造は、中國人の本質のどういふところに由來するのか？

私はクエツション・マークに無造作に答覆することが出来た。香艷美は異常に強い性愛に出發し、異常に強い性愛は、此の國の民の頂丈な生存慾の表現である現世慾の一つだ。此の烈しい現世慾は、異邦人から屢々卑しきものと蔑まれたが、その實、これが中國軟文學の特色的な美の母胎ではなかつたか！

實を言へば私自身も嘗ては中國人の餘りにも現世的なのに厭氣も催した。賤視もした。だが好く考へて見ると、中國の民、その骨幹たる漢民族の偉大さは、實に他民族とは比較にならぬ程度にまで強盛な現世慾にあるのであつた。それには單に卑しまるべき理由がないのみならず、うらばらに讚美さるべき理由がある。

ところが或る日、私はさうした思考を裏切るかのやうな現象に遭遇した。

中國民衆藝術の一大燦爛たる天橋は北京でも私の最も愛好する地域である。ある眞夏の午さがり、例によつて出掛けてみると、送中で背後から消魂しい音がした。驚いて頭をめぐらすと、一臺の大型トラックが追掛けて来る。ぎつしり審問語めになつた警士の手にせる剣銃がまるで薄の穂のやう。その中央に高手小手に纏められた死刑囚が佇立させられてゐた。

私は即座に俵を天橋の背後にあたる刑場へと急がせた。着いた時にはもう人垣が築かれ、罪囚は先農壇……舊時、先農を祀りし庶民禁制の場所……の眞赤な壇を背にして立つてゐた。

『諸君！』と、聽てこの罪囚は悪びれもせず彌次馬に向つて演説を始めた。『諸君は私が何故殺されるか知つてゐるか？ 私は金が儲けたかつた。だから禁制のモルヒネを賣つた。諸君は呉々も私の轍を踏んで、斯様にみじめな死方をしてはならない。』

演説が終ると一人の警士が、盒子砲といつて、ピストルといふには餘りに大きい短銃でストンとやつた。

罪囚の體が痙攣的に插いでバツクリ倒れた。警士はもう一度銃火を浴びせてから、扇の足を片手で掴んで、ポツ／＼と埃を塵けながら曳まつて行つた。

此の光景は期せずして私に魯迅の『阿Q正傳』を想起せしめた。主人公の阿Qは大八車で刑場へ搬ばれる道すがら、蟻の如き群衆に自分の威容を示さんと、芝居の豪傑の勇壯な歌を唱ふる。

之を要するに、中國死刑囚の臨終は極めて諦めが好いやうだ。死すること、歸するが如しと言つた鹽梅だ。果して特殊的にまで旺盛な現世慾を持つものに、これが可能であらうか？ 中國人に側した生活をなすつゝ、彼等が絶対に『諦め』を辨へぬ民であることを知る私にとつてこれは苦手な謎であつた。聽て中國人の所謂『鬼』を多少研究することによつて、この謎が解かれた。人が死ねば鬼……日本流に言へば幽霊だ……になり、鬼が死ねば靈になり、靈が死ねば何とかになる。そして永劫に死と生とを反覆する。かう中國人は觀念してゐる。然も鬼といひ靈といひ、その本體は人間と選ぶところがない。彼等には生活なき死といふことが考へられない。言ひ換へれば彼等は『死』を解し得ないほど、ことほど左様に現世慾に極端なのである。

従つて銃口を差向けられても、その腦髓は死に絡まずして現世に膠着し、彼等特有の面子を

重んじ、大衆に取亂した姿を見せまいとする。

前にもちよつと書いた通り、日本人は印度の寂滅思想を無造作に吸收した。然らばこの思想の日本への媒介者であつた中國人はどうだらう？ 寂滅思想は執拗な現世慾と兩立すべくもない。故に當然中國人は油紙が墨汁をはじくやうに、これを反撥した。

たとへば佛教の詩に對する反映を窺ふだけでも、その點が納得出来はしないだらうか！ 中國の詩人で佛教の影響を最も深く受けたのは謝靈運、王維、蘇軾の三人だと言はれてゐる。しかも此の三人の詩に流露せるは、咀嚼された佛理でなく、觀賞せられた禪趣である。

虛館絕詩訟、空庭來鳥鵲 (謝靈運)

倚杖柴門外、臨風聽暮蟬 (王維)

敲門都不應、倚杖聽江聲 (蘇軾)

執れをみても哲理の滲透なき禪趣であり、禪趣は畢竟夏目漱石が言つたやうな一種の『あそび』である。中國の詩人は役人勤めにあぐせくし、酒肉を啖ひ、妻子を眷戀する傍ら、『あそ

び』なる禪趣に現世慾の一部を満たす作用を認め、此れに參したものと觀られよう。勿論これだけで斷言するのは武斷に過ぎるけれど、私は敢て佛教の哲理は、犯極彼等に適しなかつたと言ひたい。彼等に適した哲理は寧ろ道教のそれであつた。道教と言へば直ちに老子が聯想される。次いでその虛無思想と、佛教哲理との外貌の符合からして、私の以上の説は矛盾を犯せるものとも見えよう。現に中國でさへ一般人は釋と道とを混淆し、成佛と昇仙とを一にして一、一にして一なるものと解した。然るに老子の虛無の觀念は、あの時代にそれが考へられたといふ點では大なる歴史が價值を持つが、その内容には矛盾もあり、不徹底でもあるやうだ。且つその主張は原始的愚昧に返れといふのであつて、佛教の明心見性に背戻し、更に後者が灰心滅智の小乘より濟世の大乗に邁躍せるに較ぶれば、兩者を阻む大なる溝渠の存在が疑へないだらう。

さうした兩者を奇妙に調合してしまつたのは、私としては深遠な哲理と高級な宗教への熱烈な企求を缺くまでに、現世慾の一面に迷執せる中國民の“*Малая Гер*”精神だと考へたい。これにどういふ漢字をあてがふか、一定してはゐないやうだ。『馬々虎々』『猫々虎々』『麝々

胡々』等々、勝手な書き方があり、また此の一語の内容は何國の文字をしても的確には解説できない。要するにそれは現世慾に立脚し、理窟抜きに平和に功利的に暮さうといふ中國人の生活態度から産れた、恐ろしく伸縮自在な、玄の玄なる妥協精神で、その眞諦は親しく、大陸の民に接しない限り到底了得されない。疇昔な日本人は往々にして中國人の“Mama-Huhu”を唾棄するけれど、その實此れは偉大な處世上の技巧ではなからうか？

“Mama-Huhu”精神は釋道を簡單に混合したのみならず、道教そのものすら、その源泉とみなされる老子の思想から、無限に遷されてしまひ、彼等の現世慾にぶさはしい卑近な迷信の塊りとした。故デエームス・レッグ……オックスフォード大學の支那學教授にして斯道の世界の權威……はその著『支那宗教論』で老子の哲學は立派だが、道教は徹頭徹尾無意味な迷信の塊りである。兩者の間には認めらるべき何の關係もない——と述べてゐる。その當否は暫く問はず、兎に角、さういふ風に評されるほど、道教は虛無思想を厭離して、現世慾になつてしまつた。『玄の玄、衆妙の門』を忘れて、仙人たらんことを求めた。然らばさうした仙人の最大幸福は何であらうか？ 長壽と榮耀榮華に外ならぬ。一體全體、仙人の齡がどんなに永いも

のだから、ハツキリしないが、郭璞が『千歳はまさに嬰孩なり』と嘯ぶき、李白が『一餐に萬歳を歴す』と詠じたのなどから見ると、どうも無窮の生命を有するのではなからうか？ しかもさうした仙人は、日本人が考へるやうに霞を啖ひ、茨を分けて道逢するのではなく、瓊樓玉宇に住み佳人を侍らせ、玉杯靈液の陶酔を肆にする。即ち仙人生活は現世慾の極彩色的な開放に過ぎない。前節に引用した『紫玉』の夢幻境にも斯る『仙』の觀念が鮮明に投影してゐる。

つい近頃まで辜鴻銘といふ男がゐて、エリザベス朝風な格調高き英文を自由に驅使し、世界に向つて中國文化を宣揚しトルストイやゲオルク・ブランデスなどに一種の刺戟を與へたことは、日本でも知られてゐる筈。のみならず、日本は彼に『近代の鴻儒』といふ敬稱まで與へた。だが、中國ではどうかといふに、鴻儒とも何ともみなしはしなかつた。成程中國でも彼は有名だつたが、それは在世當時から彼が既に一種の傳説的人物だつたからである。彼は女の金蓮を愛し、恰かも嗅覺の鋭敏な夫の如くその匂ひを嗅ぐのを無上の法悦となした。従つて女が好きだつた。全盛時代には金蓮美人を數人妾として圍つてゐたのみか、吉田貞子といふ大阪生れの

日本婦人まで抱へてゐた。彼はまた十三歳にして大學程度の教育を受け、英語、ラテン語、その他の歐洲語に通曉し、日本語も片言ぐらゐ喋べれたほどの天才でもあれば、モダンでもあつた癖に、時潮に逆つて例の豚の尻尾……辮髪……を死ぬまで剪らなかつた。彼はまた革命の中國を冷眼視しつゝ、專制君主々義を謳歌した、つまりところ、人が右すれば、厭でも左するといふ古怪な人物。さういふ意味で中國では有名だつた。『中國文化の精華は日本に残る』そんなことを口外したゝめ人の好い日本はずつかりお芽出度くなつて『鴻儒』の尊號を獻じたのだがさうした彼は『世界は三つの文化に分割統治される。即ちラテン系の文化、亞米利加の文化、そして中國の文化である』と廣言した。『では日本の文化は？』とある櫻咲く東の國の侍の子が尋ねたら、彼は平然として『太平洋に浮く水の泡のやうなもので、消えてしまふさ』と答へたものだ。

苟且にも鴻儒と言はれるだけに、彼が説いたのは儒教の精義であつた。その儒教と、中國人の現世慾との關係についても、私は一應詳述しなければなるまいけれど、今は紙幅の都合で出来ない。だから周章で結論だけを述べてみれば、儒教は中國の文化が横つちよに冠つた、頭に

あはない帽子で、風が吹けば飛んでしまふのではあるまいか？ それは中國人の現世慾を、現實を遠く離れた宙に反映した屋氣樓ではあるまいか？ 一瞥して儒教が甚だ現世的と見える理由はそんなところにあるのではあるまいか？ だが、それはその實渺小な一卷の馬太傳の有する程な現世性さへも持たない教へだと私には思惟される。一例を擧げてみれば、孔子は『君君臣臣。父父、子子』と説いたが、これは浮世ばなれた空想で中國の現實の姿は『君不君、則臣不臣、父不父、子不子。上失其位、則下踰其節』といふ管子の言葉をそのままだつた。總て儒教の説く所は、その逆を考へると現實の相に返るやうだ。それはど現實はなれた儒教を、現世慾強き中國人がどうして兎も角も擔いで來ることが出來たかと言へば、例の偉大なる、Mama 由臣、のお蔭であつた。辜鴻銘の場合を譬へにとつてみるならば、身體髮膚は父母から受けたものゆゑ傷をつけては申譯が立たぬと孝經にある以上、これを徹底的に傷つけた纏足など義理にも可愛がれない。然るに彼はそれを可愛がつたばかりか、嗅ぎまはしてゐる。私は彼のお説教よりも、如何にも中國人らしい煩惱を赤裸々に現はした彼のさうした奇癖を愛する。

元來、儒教は中國では信仰されたといふよりも尊る階級社會の爲政者によつて利用されたも

中華民國は五族共和の邦であるとは國民黨の唱ふるところ、その五族の中心は漢族である。此の漢族は元來が一の先進的な文化民族であつた。中國には古くから『四裔』といふ言葉がある。北狄、西戎、南蠻、東夷の四者の謂であつて、文字面を見ただけでも分るとほり、孰れにも輕蔑の意が含まれてゐる。而してさうした輕蔑を裏つけてゐるものは彼等漢民族が自らの文化的優越についての絶對的な誇りである。今試みに斯る誇りを、次に摘記した自己卑下に比較してみよう。

『……外國人どもは以前から、中國は聽て自立出來なくなるだらうと言つてゐる。彼等は中國を分け取りしようとしてゐるのだ。まア考へても見給へ、奴等に分け取りされたが最後、詩だの酒だのと言つてられるところか、尻だつて勝手にひらされないだ

原酒居たべらなを生は淫や卵



らう。』

右は、中國と帝國主義列強との接觸の初期にあつて吳研人なる人によつて著はされた有名な、且つ辛辣無比の社會小説『廿年目睹之怪現狀』中の會話の一斷片で、國危きにも拘らず彼人どもが職務なるものについての覺悟なく、酒を酌み、詩を賦してゐるのを諷したものだ。

此れを前の傍若無人な誇りに比べると、何といふ慘憺たる相違であらうか！ 私は思ふ、中國人今日の一切の墜落の根幹には、かうした自國及び自民族に對する自信の喪失、はてなき自己輕蔑が儼存してゐると。しかしさうした自信の喪失は、中國人にとつて何時までも容許さるべきものでなく、中華民族の自存自衛のためにも、今や既に奮ひ立たざるを得なくなつてゐる。

偕て話題は前に戻る。漢民族の他民族に對する侮稱のなかで北狄といふのは滿洲族、蒙古族、回族をさし、西戎は西蔵族、南蠻は中國の先住民族たる苗族のことである。東夷に至つては、私にはどうもまたハッキリ分らないが、東方の沿海地域に居住し獨立の一族をなしてゐたものをいふらしい。此等四裔のうち、自然に尊まれること最も厚かりしは長江中下流の兩岸に住んでゐた苗族で、これは耒耜を發明したくらし、純乎たる農業民族であり、嬌弱馴服を以て性と

せるものであつた。中國の史書には神農氏とか言ふ酋長のやうな、王様のやうな一人格者がゐて『木を鋤りて稻をつくり、木を採めて糸をつくり』と誌されてゐるが、實は苗族が何十年かの農業生活の経験によつて發明したものに外ならぬ。この苗族に反し、自然に眞まれること最も薄かりしは滿蒙回藏の四族であつた。彼等は砂漠か瘠地、さもなければ岩山の邊疆に棲み、游牧を業とし、兇悍粗暴を以て性としてゐた。

ところでオッペンハイマーの『國家論』の指示に従へば、苗族は當然、滿蒙回藏四族のために征服されてゐなければならぬ。『原始農耕民には……』と彼は言ふ。『狩獵民か牧畜民の特色たる好戰的な攻撃精神が全然缺けてゐた。戦争は彼等に少しの利益も齎らさぬ。さうして此の平和な気分は彼等の營む仕事の性質が格別彼等を戦争に鍛へるのでもないために尙ほ一層濃厚になるのであつた。』此の一章は實に古代の苗族そのもの一寫眞であり、それは必然『好戰的な攻撃精神』に富み、悠々五千載の歴史を貫ぬき常住不斷に中原の憂患をなした西北の邊疆民族のために征服されてゐなければならなかつた筈である。ところが極端に眞まれたものと、眞まれざりしものとの間に、漢民族が介在してゐた。彼等の搖籃の地は黃河下流の兩岸、すなはち

今の山西、陝西、河南あたりで、その地理的環境は苗族ほどに眞まれてゐなければ、また北狄や西戎ほどに虐けられてゐなかつた。加ふるに彼等自身は民族として雜種であつた。『支那思想研究』中の『支那民族性に関する考察』と題せられた論文で、私の長敬する橋樸氏は此の點に關し『支那民族の原形の生じたのは有史前である。而してそれは傳説から推想するに過ぎないが、先住民族たる神農族、之れに何時の時代にか西北より侵入し來れる黃帝族の二者が互に幾代かの間戦ひ合ひ、混住混血して何時の間にか現在の漢民族を生むるものなりと推定する』と言ひ、結局漢民族なるものは、苗族と邊疆族、農業民族と游牧民族との混血種であることが推想されてゐる。斯うして中國歴史の黎明期は種族鬭争そのものであつた。游牧民族と農業民族との、一擧にして勝敗を決するといふことのない執拗な悠長な抗争と進攻、その間に期せずして漢民族と言ふ雜種が大量生産され、環境的に相當の恩惠と、相當の虐待とを受けたがために自發的に精勵して、游牧民族の武と、農業民族の文とを擧取した『左傳』のなかに『肇啓監績、以啓山林』といふ文句がある。柴車を駕し、敝衣を服し、以て土地を開闢するを意味し、寥々たる八文字のなかに漢民族の祖先たちが黃河の流域に於て辛苦經營に努めた涙ぐましい光

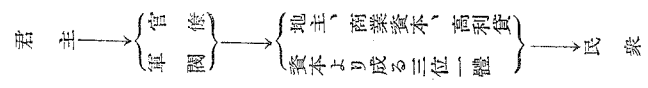
景が立體的に表現されてゐる。斯うした努力の結果、彼等は一方に於て、生活そのものに壓倒され、文化を顧みるの餘裕なかりし游牧民族に優り、他の一方に於て、生活に恵まれたあまり外侮を抗禦するだけの能力を喪失した苗族の轍をふまず、遂に中原に主人たるの勝利を擲つてしまつた。

私は今日の中國人にすら、さうした混血のあとが歴々として看取されると思ふ。最も著しき例は都會に見る中國の女性である。打見た所、彼女等は爛熟した中國文化の油壺のなから立ち現はれ、更に西洋文化の香水を浴びて *refined* され、物蔭いまでに華奢であり繊細であり端麗である。窈窕といふ言葉はかゝる女にのみ與へられた形容詞であらうことがしみじみと考へられる。だがさうした彼女たちも、一度び親しく接近してみると、山猫そのままの強烈な野性——游牧民族の本能的な戦闘心——を有してゐる。此の點は中國男性の共通の悩みであつて、例の怪奇な鬼才辜鴻銘の如きでさへ『中國の料理を食ひ、日本の女を娶り、西洋の家屋に住めば、人間無上の幸ひだ』といふやうな讒語を吐いたくらゐ、中國の女性にタチくして、兎の生毛のやうに柔順な日本婦人に心を傾けてゐた。

漢民族が中原の主となる——それまでは中國歴史の民族鬭争時代で、以後は（恐らく秦始皇の統一を以て、轉換期とみなすを得よう）階級鬭争の時代が見舞つた。勿論王昭君や蔡文姬のロマンスによつても明かなるが如く、民族鬭争の腥さい血の匂ひは決して散じてしまつた譯ではないけれど、それでも矢張り枝葉的な問題であつた。元、清の異族による統治すらも、中國歴史の大黒柱たる階級鬭争の連綿たる繋がりや断つが如きことはなかつた。それは秦によつて形成され清末に及ぶまでの長期に亘り、微塵の狂ひさへも生ぜず、殆んど膠着凝固の状態を呈した封建、または準封建的な社會構成が然らしめたのだ。

私は今しがた『耒耜』といふ言葉を持出したが、耜とは鋤の頭のやうなもの、耒とはそれに附屬した長い柄であつて、どちらも木で造られ、人の手で運用されてゐた。假りにそれが史書の傳ふるが如く神農の發明だとする、それから約二千年か二千五百年、たしか周の時代までそのまゝで續いた。周代に及び始めて鐵が應用されるやうになり、木造の耒耜一變して鐵の刃を備へた犁となり、牛馬が人の手に替つてこれを曳くやうになつた。それから現代まで、二千

六百年か七百年、犁は依然として原形のまゝで使用され、依然として農業國としての中國を支へてゐる。此の永いく歲月に亙つて無變化に使用され、しかして現に尙ほ使用されつゝある一本の犁のなかに、中國社會歴史の驚異さるべき停滞性の神祕がひそんでゐる。此の犁を二千六七百年間も活かして使ひつづけしめたのは、左に略示するが如き中國社會の封建的構成、階級對立に外ならなかつた。



犁は繼て次の時代の生産器具にその位置を譲らなければならないだらう。たとへば蒸氣犁とか、電氣犁とかいつた風なものに。耒耜はそれが使はれて二千年か二千五百年目に犁に替つたその犁も最早や二千六七百年、大陸を耕しつゞけて來た。當然交替の時期は來てゐるやうだ。だがさうした時期は前掲の表の如き社會形態の木ツ葉微塵な崩潰を前提とするだらう。

僅て今日の中國大衆に看取される一切の民族性は、『犁の時代』に完成され、その民族性は最近百年來の資本主義化の過程中に於て、中國を圍繞せる高度資本主義國民の目の前に慘酷なる

破綻を暴露しつゝある。『支那人はずるい』とか、『支那人は悪賢い』とか、それからまた『支那人は墮落してゐる』とか、さういつた一切の非難と輕蔑とは、實に過去に於て根強く完成された民族性と、新しき時代環境との間の矛盾に向つて放たれた毒箭の如きものではなからうか！

『犁の時代』に於て、中國の大衆は徳川時代の日本の農工商以上に壓迫、剝削されて來た。『民とは隕なり、盲なり、蓋し皆な愚昧無知を意味す』と『説文』にあるは、『民』といふものゝ東洋的解釋の代表的なものであつて、彼の曖昧模糊として捕捉しやうもないやうな英語の People の意味などよりも斷じて清楚明確である。東洋の統治階級の政治哲學は、斯かる見解を礎石として建築されてゐる。『民は申らしむべく、知らしむ可からず』と放言した孔子など、その方で勇敢無比なチャンピオンであり、孔孟を繼承して正統派と目せられてゐる韓愈など、御苦勞千萬にも社會を上中下の三級に分ち、おのゝ職務を限定してゐる。曰く『君とは令を出すものなり、臣とは君の令を庶民に施行するものなり。而して民とは粟米、麻絲を差出し、器具を製し、貨財を通じ、以てその上層階級に奉仕するものなり。』いらざる、お節介の冠冕堂皇たるものだ。だが中國の大衆其自身は決してさうした孔子だの韓愈などの築きたるコケ着しに乘ら

なかつた。彼等は彼等自身の血のにじむやうな體驗よりして、それが嘘ッパチだといふことを明察してゐた。中國人一般の最も普遍的な、通俗的な慾望は役人になることだ。『做官』といふことだ。それは決して役人が『君の令を庶民に施行する』光榮を有するからではなくて、一朝官服をまとつたが最後、大衆を搾取して、血を吸つた甕のやうに思ふ存分富み膨れることが可能だからに外ならぬ。彼等は斯様に役人といふものを理解してゐた。この理解の背後に、彼等自らが搾取されてゐるといふ赤裸々な自覺が潜んでゐる。

斯かる壓迫と虐待の下に處し、而してまた斯かる自己についての理解よりして、『敢怒不敢言』といふ中國大衆の基本的な性質が鑄造された。それは中國大衆に就いて特に顯著な、階級闘争の一形式である。彼等は決してだまされない。上帝をだますことは出来ても、中國人をだますことは斷じて出来ない。だまされないから敢て怒る。怒るけれども壓迫者の力が頑たる限り敢て言はない。言はざるは柔順であり、怒るは不柔順である。橋樸氏は中國人の民族性を指して『柔順の不柔順』と言つたが、誠に名言だ。滿洲を失つたことなど、中國人は夙くに諦めてゐる』などと言ふ人もあるが、それは中國人の『柔順の不柔順』を看破し得ざるに基因する。彼

等は身が觸^{さわ}れ^ぬになつても諦めるといふことをしない。何時までもく隱忍しながら時期をまつてゐる。それは階級對立の中國歴史を繙き、農民暴動のあとをチツと辿つてみただけでも容易に知るを得るだらう。何れの朝代でも、一方に統治階級自身が腐敗し、一方に農民たちの感觸する社會不安が *crusade* にまでなつてくると、忽ち大規模な暴動が爆發し、階級對立の『動』の形式を呈する。その結果、舊き統治階級は能力を失つて倒れるが、それが倒れるまでの鬭争過程に於て、飽迄も壓迫に甘んぜざる硬骨な農民等は全部が全部、擧つて、或は死亡し或は流竄してしまふ。残つたのは柔弱な農民ばかり。すると暴動の最中にそれ自身で訓練を経た新しき統治階級が崛起して、さうした農民を統治してしまふ。元だの清だの、成程『異族の中原征服』には相違ないが、しかし實質は結局上記の如きもので、その後に来りしものは階級對立の『靜』の形式である。何週繰り返されても、結局斯ういふことで、社會制度そのものには變化なく、寧ろ恰かも不老不死の象徴でもあるかのやうに、黄土を掘り返しつゞけた。

停滞せる、壓迫搾取の社會環境の中で『柔順の不柔順』を基本的習性としながら、自己の生存を保證するために、幾多の民族性が生れて來た。家族とか、部落とか、都市ギルドに於て彼

等中國大衆が惜しみなく強ひらるゝ道徳がそれだ。また上からの壓迫を緩和するための、諸外國人にとつてあまりにも不愉快に見える道徳的缺陷がそれだ。この點は一見して前の道徳遵守と矛盾するかのやうだらうが、實際的には矛盾するものでない。所謂『面子』をはじめ、すべて都合の悪いことを形式だけで胡亂化してしまふ性格、また形式を抛つて實を掴まんとする焦燥な利己主義、無理や強權にも出來得るかぎり妥協して行かうとする徹底的な便宜主義（それは猫々虎々といふ正體の知れない通俗語に最も奇抜適切な表現が見られる）その他極端に責任を廻避せんとするやうな氣風などは皆な恥づべきではあらうが、一面彼等が處した環境を顧みるときむしろ憐れまるべきところの道徳的缺陷なのだ。加ふるに彼等大衆は教育から隔絶されてゐた。恐らく世界でもつとも早くより教育機關を有してゐたにも拘らず、中國では學問は統治階級の獨占物であつた。大衆は無智を強ひられ通して來た。『民とは隕なり、盲なり』とは民衆といふものゝ定義に非ずして實は統治階級の理想を注瀾に漏洩してしまつたやうな言葉で、それを權力によつて民衆に強ひたがため、民衆は確かに九十九パーセントまで無智で終始し、さうした條件からして、いろいろの忌むべき性質が醜穢した。『支那人は墮落してゐる』といふ言葉を假

りに肯定するとしたならば、その墮落の眞の貌は斯くの如きものであつた。

星移つて……。

そして中國の前には新しき時代が展開された。帝國主義との接觸に幕を開いた最近百年の颯風的な動搖中國のなまくしい歴史がそれだ。中國自體の半封建的な社會關係は、しかし尙ほ本質的に革命されてゐない。たゞ、そのうへに帝國主義といふ帽子がのつかつてしまつた。謂ひ替へれば舊來の階級闘争の上に、更に新しき民族闘争が添加されたのである。それを表示すれば凡そ左の如きものだ。



もつとも悪いことには、中國の統治階級が、………と妥協し、帝國主義そのものが事實上の中國の支配者となつて、中國を半植民地化してしまつたことだ。………と勾結した統治階級は、搾取のための絶對條件たる中國社會の舊き構造を維持せんとことに汲々として努め、それ

がため民國と改元されてからも、中國の社會主義化は愚かなこと、民主主義化すら實現されなかつた。

だが、果して新中國は此れを良しとして喜すべきか？ あるロシア人は極めて簡単に斯う言つてゐる。曰く『地主資産階級の政權と……………支配——斯かる中國の秩序の存在は、中國に對し、自然生産力の發展の可能を奪つてゐる』と。

『掣の時代』に鑄された缺點多き民族性をそのまま保持しながら、中國の大衆は斯る嫌厭のまつた中に飛び込んだ。舊き社會においてこそ保身術として合理的であつたらう幾多の性質も、今や役立たなくなつたばかりか、斯る時代に容れらるべくもない卑陋な正體を白日の下に暴露してしまつた。外國人が中國に來て、中國大衆に接し、まづ強烈に感じさせられる不愉快さ——彼等の無禮さ、狡猾さ、不正直、胡魔化し、口先きの達者さ、度し難き小さいく貪慾、不潔、迷信——それ等が新しき時代のものでないことはあまりにも明瞭だ。

蔣介石が新生活運動を提唱し、その實踐綱領なるものを發布した時、胡適博士は、これは何も高遠な理想でもなければ哲學でもない、今日の世界で文明國民たるための最低限度の常識で

あると言つたことがある。世界の新しき時代に處するに、如何に縁遠き性質を、中國大衆が舊き時代によつて賦與され固定されてゐるたかが、此の胡適博士の批評の裏に透いてみえるではないか！

中國は今や激流的に變化しつつある。

秦以來、民國となつても尙は無上の執拗さを以て維持されて來た停滯せる社會構成は、農村破産と帝國主義進攻の加緊によつて、漸く解體の速率を早めて來た。それにつれ、中國大衆の舊時代に根を張つた性格と、新時代とのギャップは日一日と深刻化し、彼等自身で既に自覺的に苦悶を感じつつある。それでゐながらも尙ほ、…………の支配と、地主資産階級の政權とは、新時代に適應せんとして藻掻きつつある大衆に對し、まだ／＼擄取のために舊制度の維持を強ひてゐる。何といふ破天荒な矛盾であらうか！！

リーの或る閩秀作家は語る。

『この子供……彼の音楽は、どうしてこんなに悲慘なのか？……餘り悲慘過ぎる。……民衆の音楽……ロシアの民衆音楽も、かうした悲慘なものがあるが、でもそのなかには反抗力が籠つてゐる。それなのに、この子供の歌には少しの力もありはしない……』

どうしてこんなに悲慘なのか？ この白人閩秀作家の驚異的な疑問に對し、我々は極めて無難に、そして的確に答へ得るであらう。停頓せるアジアの社會に於て、恰かもその肉體の皮までも剥ぐが如き重々層々の搾取の下に曝されしかもそのイデオロギーとして儒教の如きものに強制されなければならない民衆には、たゞ凄絶なる哀歌あり得るのみであると。

私は中國に來て既に五年近くなり、然もその五年間、丁度土龍が土に潜り込むやうに、中國の大衆のなかにのみ潜んで暮して來た。そして私は、彼等が恰かも獨逸人のやうに、溢るるばかりな狂熱を音楽に對して持つてゐることを、十分に知つてゐる。彼等のうちの如何なるものも歌を愛せぬ者はない。歌をうたはぬものはない。それなのに、唯の一回も、本當に朗かな歌が彼等の唇から漏るゝを聞いたことがない。これは實に驚嘆に値する嚴肅なる一事實だ。諛諛

を弄した歌もあれば、またより多くの淫猥なる歌もある。それはちよつと聴いただけでは、愉快な歌といふ印象を興へられるかも知れない。だがそれは誤りであり、その誤りは、少し注意する人には容易に辨じ得らるゝだらう。

例へば乞食藝人によつて歌はるゝ鳳陽花鼓の歌だ。

尤もこの歌是北京では乞食藝人の口から聞かれず、この歌唄ひを題材として編まれた雜劇の『打花鼓』のなかでしか聞かれぬ。元來が淫詞艶曲であり、従つて『打花鼓』劇そのものも頗るエロテカルだ。日本の長唄の『角兵衛』あの舞陣とあの仕組みとを、もつと俗にもつと色っぽくしたものと思へば、當らずと雖も遠くない。

ヌドレー女史を驚かし、またオーストラリーの閩秀を興奮せしめたやうに、さうした妻妾、悲慘の調子は、鳳陽花鼓の歌には、勿論ありはしないし、大體に於いて浮かれ調子だ。但しそれも淋しい浮かれ調子である。よく耳を傾けてゐると、矢張りどうしてこんなに悲しいのかと怪しまれる。それもその筈で、現在民間で普遍的に知られてゐる歌詞の一二を拾つて見ても、『淋しさ』若しくは『悲しさ』の故なきに非ざるを知る事が出来る。

『妾を^{たづ}けて坐らせてたまへ。』^{たづ}扶け坐らせむとすれど、寶玉の力に叶はず、辛うじて半身起せし暗髪は、その手を差伸べ、寶玉が肌衣をとりあけたり。寶玉あわたしく彼女に着せやり、腕をとり、袖を引きなどしたる後、再びやをら横臥せしめつ。偕て彼女が興へし爪を小袋に納めたり。暗髪嘆きながらに云ふ『君よ、去りませ！ 穢くろしき此の所は君がいます所にあらず、君が身こそ大切なれ！ 今日此の逢ふ瀬にめぐまれてより、妾はこのまゝ死するとも、身に負ひし浮名を仇とは思ふまじ！』

.....

私は以上の一くだりの描寫の中に、飽迄も東洋的な、繪具具い情痴を見る。西洋のインキ臭い匂ひなど、そのなかには露いさゝかも感じられない。しかもそれには日本の情痴と何の違ふところがあらうか？ 『^か軒はお夏に縁ふかく、神のむすぶの釣手かと、たはむれかは手枕も、心せはしき契りなり……』と巢林子によつて詠はれた、彼の『歌念佛』のお夏の戀と、暗髪の戀、その二つの狂ほしき戀に、日本の女なるが故にとか、または中國の女なるが故にとか言ふやうな區別が、果してハッキリと立てられるだらうか？ 強ひても區別をつけなければ承知出

來ない人ならばいざ知らず、私にはどうも變るところなしとしか思へないのである。

しかしながら、さうした戀とか慾とか言つたやうな基本的な、本能的なものから離れ、比較的上義にのみ就いて觀れば、前にも斷つて置いたやうに、確かに中國の女は飽迄も中國の女であり、日本の女は飽迄も日本の女である。さうして、その區別は兩者の歴史の相違、環境に馴致せられたものが多い。だがその點にまで筆を及ぼさんとすれば、勢ひ大篇巨冊を編まなければならぬこととなるので、ここでは差控へ、單に兩者の異點とも認めらるゝものを、思ひつくまゝに擧げてみよう。

第一に日本の女は諦めといふことを辨へてゐるが、中國の女は絶対に諦めない。日本の女は犠牲的であり、奉仕的であるが、中國の女は自我的であり、奉仕されむことを求める。日本の女は『心』といふものを何か崇高なものと考へてゐるけれど、中國の女は『心』は肉で出來たものだと見做してゐる。辛いこと、不如意なことに出會ふと、彼女等は必ず『私は肉で出來た心しか持つてゐません』と言ふ。同じ意味のことを、日本の女は『私にも人情があります』と言ふ言ひ方で表明する。日本の女は、前にもちよつと言つたやうに、手がきたない、けれども

中國の女の手は綺麗だ。日本の女はつましやかであるが、中國の女はぶつぎら樺である。日本の女は働くが、思ひ切つて遊ぶといふやうなことはよく爲し得ない。中國の女は遊ぶばかりで労働を輕蔑する。

もつとも此處に列擧したやうな中國女性の傾向は、都會に見るものについてののみ言つたことで、村嬢、農婦等については、また自から異つた觀察が下されよう。パール・バック女史の『大地』に現はれてゐる阿蘭や、中國の新しい作家の創作など讀んでみても、その點は首肯出来るが、都會の女と田舎の女との間にさうした巨きな溝壑が出來たのは、結局中國の都會と農村の驚嘆に値するやうな時代のちがひ、環境のちがひに負ふものと言はなければならぬ。日本でも若し都會と農村とが現在よりももつと甚だしく凡ゆる點に於て隔離されて行けば、自然さうした現象が生じてくるにきまつてゐよう。

嗚て中國の女は諦めぬ……と私は今しがた言つた。だがこれは何も女のみと限つた譯でなく男女の性別を超越して、中國人といふものが一體にさうしたものなのである。日本人がおしなべて誤解してゐる點は、これであつて、中國人に諦めを要求するのは、猫に鯉節を喰ふなと要

求するに等しい。中國五千年の歴史は何か？ それは世界に類例のないやうな、執拗な、まっ黒な叛逆の連鎖である。その點に氣ついたらば、中國人が如何に諦めを欲しない人間であるかも諒解出来るであらう。しかもさうした傾向は女性に於て殊の外顯著である。私は嘗て中國の女のある事件について世話してみたことがあるが、日本の女だと長くて一ヶ月も経てば『諦めませう』と投げつてしまふであらう事を、何時までも諦めない。もう五六年になるが、今以てまだ諦めてゐない。恐らく彼女は希望の全然あり得ないその一事に、一生涯執念を断たないであらう。

中國の女が自我的であり、奉仕を強要する點は、丁度日本の男に彷彿してゐる。日本の男は一步外國に踏み出した時、しんどくと日本の女が従順、貞節、または没我的な點に於て、世界に例のない、特殊な存在であることを知る。だが其の弊、さういふ日本の女に生み落され、育てられ、而してまたさういふ女を妻とし、家庭の中で無條件な我儘を許されて來て自分達——日本の男——が、また世界に例のない我儘勝手な、傍若無人なお化けとなつて、炎天に火を吐きかねまじき振舞ひをしてゐるといふことに對する認識とか、反省とかは少しもないから、ど

うも私などには怪訝にも、また可笑しくも思はれるのである。

中國の女の手が綺麗だといふことは藝にも記した通りで、今さら繰返し贅説するまでもなからう。一代の風流文士であり、あくまでも東洋風な美學者であつた李笠翁は、その『鬢妝集』と題する隨筆の中で『女性にしてその手の嬌らかき者は必ず聰明であり、その指の尖れる者は必ず多慧なり』と云ひ、その手によつて女の頭腦の働きを卜してゐるが、これなどは、理窟のものとしては恐らく價値なく、寧ろ優美なる女性の手に對する崇拜の熱情の表現とみらるべきものである。春筍の初萌えの如く、秋蘭の始苗の如き、その手に對する中國女性の執着は、日本の女などの想像も出來兼ねる程度のものである。彼女等は單にその手を大切にいたはるのみでなく、その指の爪に對しても異常な注意を拂ひつゝ、これを保護したものだ。今でも北京あたりの骨董店をひやかしてゐると、屢々細く、角雉の如く反りを打つた一つがひの銀の七寶の管を發見するだらう。それは嘗て高貴の女性等が、長く伸びた爪を庇ふために用ひた爪サックである。今しがた引用した『紅樓夢』の中で、晴雯が寶玉に咬み切つて興へたといふ『蕊の葉の如くなる二つの爪』も、斯うした習慣についての知識をあらかじめ用意してゐないと、しつ

くり、理解することが出來ない。

中國の女のぶつきら棒、これは西洋人の眼に『お辭儀ばかりしてゐる』と映ずる日本の女とは全く對蹠的である。私は今迄に汽車の中などで、ぶつきら棒を介しての日本の男と中國の女との珍風景を屢々目撃することがあつた。はじめて中國に來た日本の男などは、大抵中國の風習を知らず、たまく席を同じくした中國の女に優しく話掛けるとか、又は親切に世話したりする。日本の女ならば勿論さうした場合お辭儀と微笑を以て酬いるけれど、中國の女は決してさうしない。極めて冷淡に唇を尖らし、ツンとしてゐる。未知の女に紹介もなくして言葉をかけるなどと言ふことは、中國では無禮千萬の行爲と見做されてゐる。だからして彼女等は益々ぶつきら棒に振舞ふ。さうした場合の日本の男のキョトンとした姿ほど隣れにも滑稽なものは世の中にまたとあるまい。もつともさうしたぶつきら棒には意識的にさうする理由があるけれど、さうでない時でも……譬へば普段の物の言ひぶりなど概して愛想がない。

中國の女の遊び好きは彼女等の特性(?)のもつとも顯著なものゝ一つである。若し彼女等に芝居と麻雀と宴會とを不斷に興へて置いたならば、彼女等は百パーセントまで満足し切つて

その胸には如何なる邪心も萌さないだらう。彼女等は丁度霜降り雪降る秋冬への用意を怠り、絢爛なる一夏を狂歡に過ごす彼の寓話のなかのきりぎりすに似てゐる。もし彼女等の靈魂が不滅であつたならば、彼女等は死して後までも——^{短夢}短夢の下でまで、尙ほ遊びたはむれるであらう。

『嫉妬異草』といふ有名な筆記小説集の中に『闘蟋蟀』と題する短篇がある。

元來中國では昔から蟋蟀を賭博の具に供して來た。それを闘はして勝負を決した。ところがさうした賭博用の蟋蟀の鑑定に特技を有する楊なにがしといふ男が、ある日良蟲を求めてさまよつてゐると、不圖、烟鬟雲鬢、その面は霞の如く、その眉は蛾の如き、年のころ二十あまりの結納たる女に出會つた。その女が、どうかお越しを願ひたいと言ふ。何氣なくついて行くと高門華屋にいざなはれた。花だの竹だのが垣を繞つて植はり、遙かに蟋蟀の鳴き聲の、清きこと玉を臺つが如きを聞く。女は楊なにがしに對して、蟋蟀をもてあそびつゝ此の永夜清宵を過ごさむと言ふ。見れば部屋の内には巨燭點せられて白晝のやう。おびたどしい蟋蟀が立派な道具のなかに飼はれてゐる。楊と女とはいくたびか試してみたが、いつも楊の蟋蟀が朝歌を學

けてばかりゐる。最後に女が言つた。

『こんどそなたが勝つたなら、此の高價な飼用の具をみな呈上しよう。けれど若しわらはが勝つたなら、そなたはどうしやる？』

楊は身邊に何も帶してゐなかつたので嘔と當惑した。すると下婢の一人が女に囁いた。

『昔、殿様とあなたさまと斯うしてお遊びなされし折には、もしあなたさまが負けられると、その夜のお側をあそばしたではございませんか。』

女はうなづき乍ら莞爾笑つた。楊が負けななら香閨に伺候して女の命に従ふといふ條件が成立した。勝負の結果は果せる哉、楊が負けてしまつた。枕席の情、こまやかなりし後、やがて女は、わらはは生きたる人に非ず、宋の大臣の賈似道の寵姫なりしが、死せし時もてあそびし蟋蟀と共に興津城に葬られしなりと言ふ。そしてそのまゝ楊と女とは忽ち陰陽の境を異にしてしまつた。

話はこれで終つてゐるが、茲に女の言葉の中に現はれてゐる賈似道とは宋末の奸雄にして、

蟋蟀の賭博に耽りつゝ、國の亡びるをも顧みなかつた男である。それはとまれ、墓の中でまで遊ぶといふ、此の小さき怪しき物語が、私には中國の女の一つの特性をまぎ／＼描破してゐるやうに思はれるのである。

新支那の女性

それは新聞中の新聞とも言ふべき最近の出来事である。上海のキャベレーだのカフエーだのが、突如として出現したある強敵の前に怖毛をふるつた。斯うは言つたものゝ、其強敵は、別段ボ一の小説に描かれた、モルグ街の駭慄の正體のやうな物凄なものではない。それは實に上海の旅行社に雇はれた若き中國女性のガイド達であつた。世界の一切の國籍を網羅した浮氣な Shanghaiander にとつて、彼女達の出現は餘りにも紅き刺戟であつた。それがため彼女達は忽ち評判的となり期せずしてキャベレーの舞姫などに對する鋭き競争者となつてしまつたのである。さうかうするうちに彼女達の國際色濃厚な鬪闘が、日に／＼上海の支那街に漂ふ燒豚のほほほにも匂ふやうになつたので、とう／＼市政府で堪りかね、お布令を出して禁じてしまつた。かうして彼女達の香艷な跳躍も、權花一朝の榮えを誇つたのみで、今では『昨日